練馬郷土史研究会会報
第398号

慶珊寺・富岡八幡宮の豊島氏関係史料について

伊藤一美

はじめに

練馬区にゆかりの深い豊島氏。その子孫と称える下総豊島氏が建立した寺、それが花翁山慶珊寺（横浜市金沢区・真言宗御室派）である。また富岡八幡宮（金沢区富岡東）もまた同じ豊島氏伝承を伝えてきた神社でもあった。

神奈川県立金沢文庫では令和七（二〇二五）年二月七日から三月二十三日まで「慶珊寺と富岡八幡宮の名宝」展を開催した。同寺所蔵の貴重な寺宝や仏教書など多くの新出史料が展示された。今回は、同寺と富岡八幡宮に伝わる豊島氏関係史料について改めて焦点化していきたい。なお関係史料は同特別展図録『慶珊寺と富岡八幡宮の名宝』金沢文庫二〇二五（図録と略）に網羅されているので参照されたい。なお拙稿「豊島刑部少輔信満の刃傷事件とその背景」（『練馬郷土史研究会会報』第三八六～三九六号二〇二一～二五。会報と略）を参照されたい。

1「慶珊寺縁起及富岡八幡宮縁起」の豊島氏関係

慶珊寺が所蔵する「慶珊寺縁起及富岡八幡宮縁起」の写真を掲載する展示図録から一部について取り出して読み下しにする。

（史料1）

「それ時に仁王八拾二代後鳥羽院御宇、建久弐〈辛亥〉の年、頼朝公、相州鎌倉鶴岡に於て、八幡宮を建立し給ふ、厥頃に迨び、久良岐郡の富岡の庄に於て、当地民屋鎮護として、摂津国難波より蛭子尊末社を請け、一ケの官舎を建造し、御性霊を遷入し奉る、西宮夷三郎これなり、年来相ひ続けて、ことに六月十五日、八月廿五日、荑（当カ）るに御酒を供し、二季の祭礼あり、それより以後、尊崇し奉ること年久し、蓋し後堀河院御宇、安貞元丁亥歳皖（晩）夏三五の祭日、富岡の傍衢（傍屋）、一把の茅屋に於て、白髪老翁あり、忽然と僧来たる、食を乞ふ、翁、答へて曰く、与へるべき饌なし、ここに今日祭のため麦酒これあり、これを与へんと、この僧、麦酒を支へ、茅の一葉にてこれを啜り飲みて曰く、吾はこれ八幡なり、今日より吾を祭るべし、信心の輩に於ては、悪魔を退け衰憐を垂れ、加護すべし、化して去る、これにより斯の神社、八幡へ祝替、年々祭らしめ懈怠無し、然りと雖も不孝にして濁乱無道の代に変じ、神社仏閣破壊して兵乱止む時無くして、四海不穏か、然る處、近代に逮び、源朝臣内大臣徳川家康公、関八州を領納し、勢漸く四夷八荒を鎮めんと欲す處、意ならず、石田治部少輔三成、反逆を催し、天下を覆さんとす、慶長五庚子年九月十五日、美濃国関原に於て、甲兵を備ふ、家康公いはく、是所天与なり、幸にして一戦に及び、これを征伐す、（下略）」

本縁起の前半は、富岡八幡宮の成立に関する伝承を記す。執筆者は近江国蒲生郡大崎吉成となっている。

同八幡宮は建久二（一一九一）年、源頼朝が摂津難波の蛭子尊を勧請したことが始まりと伝え、後に翁（八幡宮化身）の出現に因み「八幡宮」と変えたという。この年代を鎌倉時代の安貞元（一二二七）年としている。その後、徳川家康などの記載が続く。特に奥に記す識語が重要である。慶珊寺蔵本から該当箇所を抜粋する。

「寛永三丙寅稔季春吉日、吉成（花押）　右、同年の猟月（十二月）下旬、発承留（ママ）、公の釣命（徳川秀忠）、即ち位は諸大夫、刑部少輔に任じられ、則ち主膳正を嫡男に譲り補すものなり」。

同様の記載は、富岡八幡宮蔵本、東京大学史料編纂所蔵の同縁起にも記されている（図録二十四P）。これによれば寛永三（一六二六）年、豊島明重は刑部少輔となり、子どもの継重（吉継十一歳）が父の官職を継ぎ主膳正となったと記す。

『東部実録』巻十三寛永三年五月の記事によれば、将軍秀忠の上洛に際して「御目付衆」の一人

11月例会

＊＊＊晩秋の鎌倉甘縄を歩く＊＊＊

日時：11月20日(木) 13時

集合場所：JR鎌倉駅西口時計台付近

コース：安達氏屋敷跡―鎌倉文化交流館
「特別展 海でつながる東アジアと鎌倉」
―佐助稲荷社―銭洗弁天―鎌倉駅東口
（15時40分ごろ）

案内：伊藤一美氏
（会員・鎌倉考古学研究会理事）

参加費：500円
特別展入場料は当会負担とします
お誘いあわせおいで下さい

高札場

○五月例会　五月二十九日(木)
新緑の秩父札所巡り(5)

午前10時好天の西武秩父駅前よりマイクロスで三十三番菊水寺へ。本堂は間口八間の入母屋造りで広い土間から本尊聖観音を拝む。

三十一番観音寺は石佛の寺、長い石段を上ること十五分、聖洋の滝の横に観音堂があり、まだ奥にお堂があるというが、長い登りで疲れた一同辞退して、近くの観音茶屋で昼食とする。

三十四番水潜寺は本尊千手観音、脇侍が阿弥陀如来と薬師如来という珍しい組み合わせ、これに参拝してめでたく結願となった。番外で近くの秩父華厳の滝を見て三時半ごろ西武秩父駅前で解散。

■当日の参加者十六名（うち非会員一名）
上原菊枝　大河勝正　鎌田茂男　入谷加代子
栗原末江　島崎幸夫　鈴木順三　荻原由美子
土屋京子　中平和成　柿島香也子
寺田千香子　中島正比古　船渡しげ子

○七月例会　七月二十六日(土)生涯学習センター
講演「土肥實平の真実」　伊藤一美氏

土肥實平は頼朝の旗揚げ初期から従い石橋山合戦では頼朝を一人で助けて逃げた、という程に尽くした。このため頼朝の信頼極めて厚く、源平合戦中には代官として京都にあり「玉葉」で九条兼実にも認められている。

合戦では梶原景時と並んで義経、範頼をたすけて活躍しており、ともに近国総追捕使に任じられている。平家滅亡後もこの職にあったので義経を追捕する立場になった。

奥州合戦にも参陣し頼朝の上洛には北条義時等七人の随兵の中に入っている。

＊次頁下段に続く